

## 博士論文全文の要約

博士論文題目：『中国雲南省における徳宏タイ族の即興うたと感性の民族誌的研究』

著者名：伊藤悟

本研究は、即興うたを主な考察対象として、うたを歌い、聴く人びとの、主観と客観が共存する体験に着目し、即興うたの実践に関する民族誌的記述から、徳宏タイ族が育んできた文化的な感性を明らかにするものである。

即興うたは中国西南部に広く見られる伝統文化の一つであり、生活の基本技能として身につけられ、娯楽や恋愛をはじめ、様々な社会的場面において歌われるものであった。徳宏タイ社会では、現代化により若者に即興うたの技法と実践感覚は継承されなくなり、伝承の危機に瀕しているが、他方で、民間において職能化することで新たな社会的文脈を獲得して実践されるようになった。本研究は、主に即興うたを駆使する新旧2種類の職能者、すなわちシャマン的宗教職能者と近年登場した民間職能歌手を事例として取り上げ、即興うたをめぐる具体的な実践技法や、体験と文化的感覚の相互関係、そして実践の現場や文脈との関係性について考察している。また、両職能者の実践の特徴や場を収めた民族誌映画を制作し、非言語的で、情動を生じさせる感性を考察する一助としている。

第1章では先行研究を踏まえ、本研究がうたのテキストや音楽の形式や構造を論じるのではなく、また、実践をめぐる人びとが言語化する解釈や意味について論じるのでもなく、主観と客観を交渉しながらうたを歌い聴く実践とその社会的文化的文脈との関係性について考察するものであることを述べる。

第2章と第3章では、本研究の対象である徳宏タイ族とその社会と宗教について概説する。まず第2章では、村落社会の組織構造について概観し、家族や親戚そして友人、村落共同体といった社会関係のなかで志向される平等主義的価値観が他人と同じであろうとするユン・ブーンという心理にもとづくことを指摘する。

徳宏タイ社会における即興うたの実践とその体験は、霊的存在や魂をめぐる宗教的世界観と深く結びついている。よって、第3章では、上座仏教と精霊信仰、そしてシャマニズムを概観し、人びとの体験を宗教的経験として解釈する「肉体一魂」という認識的枠組を素描する。この枠組は即興うたの体験や評価を言語化する際にも用いられている。

第4章以降は即興うたに関する民族誌的記述と考察を行う。

まず第4章で、徳宏タイ族の即興の掛け合いうた、カーム・マークを取り上げ、その詩的表現技法についてローカル概念のラム・カームとゴップ・ガイーを導きの糸として分析し、歌い手たちが「いまーここ」において詩的技法を駆使する実践感覚を考察する。ここでは、即興うたの事例を、客観的構造や規則の分析のためにテキストとして書き留められうるものとみなすのではなく、人と人のコミュニケーションのあいだから生起する出来事と見なす視座をとる。これにより、歌い手と聴衆が真と偽、現実と虚構の価値判断を曖昧化する共犯関係を結ぶなかで、うたを実践する協働性が、忘我的快感カオ・ザウという感性的体験をもたらすことを指摘する。

第5章と第6章では、シャマン的宗教職能者ヤーモットの即興うたについて、死者の魂をピ

一（霊）へと変態させ、霊界へ送り届ける送霊儀礼、ソンコーカオの事例から検討する。

第5章では、ヤーモットが儀礼遂行のために用いる即興うたの表現技法の特徴を分析する。まず、雲南の少数民族社会には、死者の魂を祖霊の故郷へと帰す「送魂」の儀礼が広く見られることを確認したうえで、徳宏タイ社会には仏教儀礼において経典テキストを朗誦することで一方的に魂に働きかける方法と、シャマン的宗教職能者ヤーモットが、自分の守護霊が死者を諭しながら霊界へと導く様子を即興うたで中継して聴衆に聴かせる方法とがあることを述べる。その上で、ヤーモットの中継うたが聴衆の間接的な参与によって展開するその構造と、ヤーモットのうたの一人多役的な表現技法を明らかにする。

第6章は、ソンコーカオの儀礼場に出現する、ヤーモットの即興うたと聴衆の参与がつくりだす、現実世界と霊的次元が曖昧化した時空間について考察する。ここでは、徳宏タイ族の世界観を構成するモノに宿る霊性ミンと、うたを聴くことで抜け出た聴衆の魂が、儀礼場とうたの空間を往来する様子と、その動きを受容する人びとの文化的感覚について論じ、また、儀礼に参加することで起こる感性的体験について明らかにする。

第7章は、現代社会における即興うたの新たな展開について、うたの民間職能歌手の登場とその実践形態、そして聴衆の体験の変化を考察する。現代化のなかで、村落社会の生活は大きく変化し、生活のなかに根づいていた即興うたは若者たちに歌われなくなった。しかし、新たに登場したうたの民間職能者は、仏教儀礼など祝祭の場でパフォーマンスを行うようになり、その活動を記録した映像メディアがローカル市場で流通することにより、洗練されたうたが広く聴かれるようになった。この過程を即興うたの職能化に貢献したワン・シャンヤーのライフヒストリーから概観し、さらに彼女らが考案したパフォーマンスが仏教儀礼など祝祭の場を受容されて上演されるようになった理由と、どのような実践形態が儀礼主催者たちに歓迎され、人びとにこれまでとは異なる質の宗教的体験をもたらしたのか考察する。

以上の各章での議論を踏まえ、本論文の結論は、以下の通りである。徳宏タイ族の即興うたは、一見して自由な「雰囲気」のなかでお互いの心情やイメージを交換しつつ出来事を創り出しているようにみえる。しかし、現在のうたの実践の文脈は主に仏教儀礼やシャマニズムの儀礼との関係にあり、そこでの体験は「肉体一魂」という認識枠組みを基底に据えた宗教的目的や価値観において方向づけられている。うたの実践によって人びとの感性を惹きつけ、没頭させるイメージの時空は、日常生活を通して身に付けられる徳宏タイ族のあるべき振る舞い方や宗教観を土台としつつ、人びとを包み込む「雰囲気」といったその場の状況に大きく依存して立ち現れる。よって、彼らの即興うたは、「いま—ここ」における他者との協働によって、その都度「わたし」が生きて在る世界との関係性を、その文脈に即した価値観によって秩序化して、世界に対する理解を拡張する技法でもある。

本研究は、即興うたを聴き、歌う文化的感性について、うたの実践と場の相互作用から生まれ、その関係性をつくる「雰囲気」の諸相に着目しながら民族誌的記述を行った。他方、即興うたには詩的技法にもとづく言語行為としての側面があり、今後、本稿では重点を置かなかつたうたのテキスト内容から感性をすくい上げるため、「いま—ここ」という実践感覚や、そこに在り、その場を動かす「雰囲気」という視座を取り入れて分析を試みたい。これにより即興うたが表現する徳宏タイ族の感性をより多面的、具体的に明らかにできると考える。